

通し番号	5119
------	------

分類番号	R04-24-12-2
------	-------------

葉ニンニクの収穫期間を拡大する栽培法を確立しました	
[要約] 葉ニンニクの鱗片を低温処理することで出芽や生育が早まり、9月下旬植付の場合、収穫割合50%到達日は、無処理に比べて10℃30日処理が約100日、5℃30日処理が約80日早くなる。また、12月から1月植付で、有孔農POフィルムをトンネル被覆することにより、3月中旬から4月に収穫できる。葉先枯れの発生は、不織布をトンネル被覆することで軽減できる。	
神奈川県農業技術センター・生産技術部	連絡先 0463-58-0333

[背景・ねらい]

県では、平成26年3月に「県西地域活性化プロジェクト」を策定し、「未病の改善」をキーワードに地域の活性化に取り組んでいる。このプロジェクトに位置付けられた薬膳植物等利活用促進の一環として、薬膳料理に利用可能な農産物の検索及び栽培試験を行ってきた。葉ニンニクは、県西地域及び県央地域で作付けが増えていることから、収量や品質の向上を図るため、収穫期拡大や低温期の葉先枯れ対策について検討する。

[成果の内容・特徴]

- 1 鱗片の低温処理(5~10℃、10~30日)と早植えの組み合わせにより出芽が早まり(データ省略)、収穫割合の50%到達日で比較すると、無処理に比べて10℃30日処理で106日、5℃30日処理で85日各々早くなる(図1)。また、低温処理期間が長いほど前進効果が高くなる(図2)。
- 2 低温期に発生する葉先枯れは、不織布(パオパオ90)のトンネル被覆により発生が軽減され、可販率が高くなる(表1)。
- 3 12月から1月植付で有孔農POフィルム(ユーラックカンキ2号、換気率3%)をトンネル被覆することにより、3月中旬から4月収穫ができる(データ省略)。
- 4 これらのデータを参考にして、葉ニンニクの収穫期間拡大の作型例を示す(図3)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 本試験研究成果は、葉ニンニク品種‘ハーリック’を用い、施肥量(成分量)N:P₂O₅:K₂O=15:20:15kg/10a、株間15cm、条間15cmの黒ポリマルチ栽培したものである。
- 2 作型例は、気象条件による年次差が生じることがある。
- 3 5月上旬頃になると抽苔し、鱗片が肥大して茎部も硬くなるため、4月下旬までに収穫する。

[具体的データ]

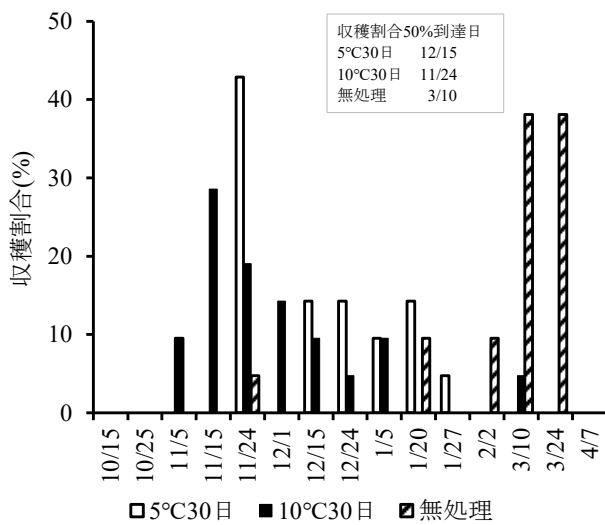


図1 低温処理温度別の収穫割合の推移
(2021年9月22日植付け、草丈60~70cmで収穫)

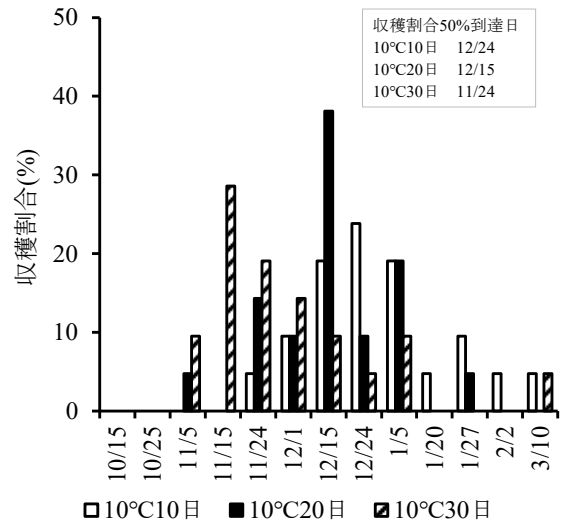


図2 低温処理期間別の収穫割合の推移
(2021年9月22日植付け、草丈60~70cmで収穫)

表1 不織布のトンネル被覆が収穫物及び葉先枯れに及ぼす影響

処理	地上部重 (g)	草丈 (cm)	茎径 (mm)	葉数	SPAD ^z	葉先枯れ ^y (0-4)	可販率 ^x (%)
被覆 ^w	67.0	79.7	15.1	5.9	65.4	19.0	76.2
無処理	57.4	72.6	14.7	5.4	68.8	36.9	61.9

植付日は2021年11月15日、各試験区7株(n=3)、計21株調査。収穫期間は2022年4月7日~2022年4月20日。z: 展開葉3枚の平均値。値が高いほど葉色が濃い。y: 葉先枯れは発生度をなし(0)~甚大(4)の5段階で評価し、葉先枯れ=Σ(発生程度×発生数)/(調査数×4)×100により算出した。x: 葉先枯れの発生程度が4、草丈30cm以下等出荷不能とした。w: 2021年11月15日~2022年4月7日まで不織布(パオパオ90)でトンネル被覆した。

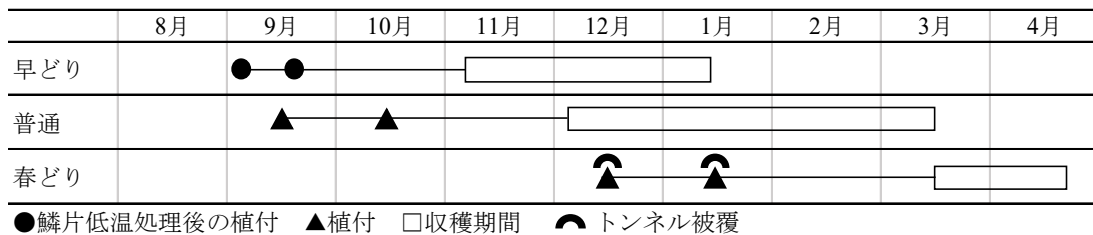


図3 葉ニンニクの作型例

- [資料名] 令和4年度試験研究成績書
- [研究課題名] 薬膳料理に使用できる農作物の栽培法の開発
葉ニンニクの栽培法の検討
- [研究期間] 2016(平成28)年度~2021(令和3)年度
- [研究者担当名] 古和口智絵、高田敦之
- [協力・分担関係]